

「山村留学+英語教育」の試みー群馬県くらぶち英語村の事例

黒 岩 裕*

はじめに

2019年11月最後の週末、群馬県高崎市倉渕町にある「くらぶち英語村」を訪問する機会を得た。くらぶち英語村ではこの週末、2020年度入学を希望する子どもたちの体験留学が行われていた。くらぶち英語村は自然体験に英語教育を加えた新たな形の山村留学を行っている。山村留学とは、子どもたちが親元を離れて農山村に1年単位で転住し、地元の小中学校に通いながら豊かな自然環境の中で成長することを目的とする国内留学制度である。

今回の訪問に関する事前の打ち合わせでは、くらぶち英語村の日本人スタッフで主任指導員の大嶋しおりさんに大変お世話になった。またくらぶち英語村に到着した際には、高崎市総務部企画調整課の高橋秀郎、深尾耕至の両氏にくらぶち英語村設立の背景や現状について詳しく説明して頂いた。ちなみに高橋さんの名刺には、くらぶち英語村「村長」という肩書が書かれている。

ここでは、2日間の滞在中に高崎市職員の方々と英語村のスタッフから説明して頂いたこと、子どもたちから聞いたこと、私が英語村で参観したこと、さらに2020年度通年コース留学説明会資料のデータなどを交えながら、このユニークな取り組みについて報告したい。

1. くらぶち英語村の概要

くらぶち英語村は2018年4月、廃校になった高崎市立倉渕川浦小学校の跡地に建てられた新

築の寄宿舎で初年度を迎えた。2011年3月に倉渕川浦小学校が廃校になった後、その跡地利用についてはいくつかの案が検討された。芸術村設立などの案もあったが、英語教育を重視する高崎市の教育方針もあり、くらぶち英語村を設立することが決まった。高崎市の富岡賢治市長は文部省生涯学習局長、国立教育研究所所長、群馬県立女子大学学長を経て2011年に高崎市長に就任し、高崎市内のすべての小中学校にALTを置いて、小学校1年生から週1回の外国語活動の授業を行うなど、英語教育に力を入れている。英語村は、高崎市職員と公益財団法人育てる会職員による1年間の準備期間を経て2018年4月に第1期生を迎えた。

くらぶち英語村は高崎市倉渕町にある寄宿舎が活動の拠点となっている。倉渕町は高崎市の北西部に位置し、西側は長野県軽井沢町に接している。町を流れる烏川兩岸の里山の中に民家が点在し、多くの山林に囲まれている。高崎市の市街地から遠く離れた山の中にあるため、近所でサルや猪を見かけることもある。倉渕地区の気候は山間部型の気候で日中と夜間の温度差は大きい。冬の寒さは厳しく、マイナス10℃近くまで気温が下がることもあるが、降雪は年に数日だけである。倉渕地区は幕末の天才、小栗上野介終焉の地として、さらに道祖神の里として知られている。食文化としては、郷土料理の「おきりこみ」が有名で、街道沿いの道の駅でも提供されている。「おきりこみ」は太いうどんに地元の野菜や山菜を加えたもので、山梨県のほうとうに似た料理である。

*コミュニティ人間科学部



くらぶち英語村の寄宿舍

くらぶち英語村の寄宿舍は木造2階建てで、約8割は地元のヒノキや杉が使われている。延べ床面積は1334.71m²で、1階には、事務室、学習室、食堂、浴室の他、薪ストーブが置かれた円形・階段式の談話コーナーがあり、ここでミーティングや英語学習などが行われる。2階は吹き抜けを真ん中に男女2つのセクションに分かれていて、それぞれのセクションに共同部屋、洗面所、洗濯室、物干場、トイレなどがある。共同部屋は和室で、1部屋あたり4名の児童・生徒が寝起きを共にしている。

2. くらぶち英語村の子どもたちと寄宿舍の生活

くらぶち英語村には、小中学生が親元を離れて1年間この寄宿舍から地元の倉渕小学校、

倉渕中学校に通う通年コース、夏休みと冬休みの短期集中留学コース、1泊2日の週末コースの3つのプログラムがある。通年コースには表1の通り2019年9月1日現在22名の児童・生徒が在籍している。内訳は小学生13名と中学生9名である（男女内訳は男子10名、女子12名）。初年度の2018年度は21名の子どもたちが通年コースを修了し、そのうち6名は2019年度も引き続き通年コースに在籍している。通年コースに入った子どもたちは住民票を移して倉渕町の住民になるが、夏休み、冬休み、春休みの長期休暇の時は実家に帰ることができる。夏休みの短期留学は10泊11日が2回、冬休みの短期留学は3泊4日が1回行われる。今年度の夏の短期留学コースには25名の定員の5倍を

を超える応募があった。週末コースは年間15回行われるが、参加者の約3割は地元高崎市の子どもたちである。

表1から分かるように、小学校では小4から小6の計77名の内、約17%にあたる13名がくらぶち英語村の児童であり、中学校では61名中15%の9名がくらぶち英語村の生徒である。高崎市は英語村に少子化対策としての効果は期待していないとのことだが、英語村がこの地区の小中学校の児童・生徒数の減少に歯止めをかけているという側面もある。

くらぶち英語村の寄宿舎に暮らす子どもたちは毎朝5時50分に起床する。その後英語でラジオ体操をして朝食をとり、登校するまでに清掃、洗濯などを行う。小学生は午前7時ごろ寄宿舎を出て4キロの道のりを歩いて倉渚小学校に通い、中学生は午前7時40分ごろ寮を出て自転車で6キロ離れた倉渚中学に向かう。小学校、中学校から帰寮した後は1、2時間宿題をすることになっている。寄宿舎にはテレビ、スマホはない。子どもたちはサッカーやカードをして遊び、散歩や読書などをして時間を過ごす。家から遠く離れた土地で共同生活を送ることは子どもたちにとって容易なことではない。早起き、ホームシック、遠路の登下校、友人関係など、いくつもの壁を乗り越えながら子どもたちは成長してゆく。

くらぶち英語村の寄宿舎では、7名の日本人スタッフと8名の外国人スタッフが子どもたちの指導を行っている。スタッフは近所に借り

受けた住宅で暮らしながら、登校前と下校後の時間を通年コースの子どもたちと寄宿舎で過ごしている。外国人スタッフの出身国は、アメリカ、カナダ、タイで、ALTの経験者も数名いる。外国人スタッフは英語を使って子どもたちと暮らし、後述する様々な英語活動を指導している。日本人スタッフも多くの場合英語を使って子どもたちと話している。ただし子どもの具合が悪い時や喧嘩の話し合いの時などは日本語を使うとのことである。

英語村で学ぶ子どもたちは、ここで都市部では経験できない様々な自然体験をする。森と山に囲まれているため、週末には度々山登りやキャンプに出掛ける。近くに「わらび平キャンプ場」があり、子どもたちはそこでテントを張り、寝袋で寝る体験をする。夏には清流で川遊びをし、冬にはスケートをすることもできる。また竹を使った工作など、自然を利用した様々な遊びを覚えることもできる。特にイベントがなくても、日々豊かな自然の中で暮らすこと自体が都会の子どもたちにとって貴重な自然体験になっている。

くらぶち英語村には英語教育や自然体験に加え、海外の文化について学ぶ機会もある。Culture Dayには、子どもたちは外国の文化について学ぶ。イースターやハロウィーンなどの文化体験活動をしたり、外国の料理を作ったり、タイから来た子どもたちと交流したりすることもある。

<表1>

■倉渚小学校・倉渚中学校の児童・生徒数

(2019年9月1日現在)

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	合計	中1	中2	中3	合計
男	13	6	8	19 (4)	15 (2)	9 (0)	70 (6)	14 (3)	9 (1)	8	31 (4)
女	7	11	6	11 (1)	12 (2)	11 (4)	58 (7)	14 (2)	4 (2)	12 (1)	30 (5)
合計	20	17	14	30 (5)	27 (4)	20 (4)	128 (13)	28 (5)	13 (3)	20 (1)	61 (9)

*カッコ内の数字はくらぶち英語村の児童・生徒数

(出典：くらぶち英語村2020年度通年コース留学説明会資料)

3. くらぶち英語村設立の目的

くらぶち英語村の運営は高崎市から委託を受けた公益財団法人育てる会が行っている。育てる会は約50年の山村留学の実績をもつ法人で、長野県大町市に2か所の山村留学施設を持つほか、長野県、島根県、兵庫県、高知県、さらに群馬県のくらぶち英語村で山村留学の指導員派遣や運営の受託を行っている。

英語村の運営には2019年度で年間約1億7000万円の費用が必要となる。月謝、教材費等の収入や国からの過疎対策関連の財政措置などで賄えるのは半分弱で、残りは高崎市が負担している。高崎市がこのような支出を負担するのは、地域活性化や人材育成など、金銭に換算できない様々な効果やメリットがあるからである。

高崎市が上述した経費を負担してくらぶち英語村を運営する目的は大きく分けて2つある。1つ目の目的は地域の活性化である。関東を中心に全国各地から集まった20数名の子どもたちが倉渕の地域社会に加わることで、様々な交流活動やイベントが行われて地域が活性化する。もう1つの目的は国際的な人材の育成である。前述のように、高崎市は英語教育と国際的な人材の育成に力を入れている。英語村は、スタッフとの共同生活や自然体験を通して英語を学ぶことで、教室内で行う読解と文法中心の従来型の英語教育とは異なる英語教育を提供している。また寮での共同生活は、協調性や積極性、さらに自立独立の精神の育成にもつながる。寄宿舎の談話コーナーには英語村のCore Values（基本的価値）として、Respect（人物・自然を尊重する）、Independence（自立する）、Self-Growth（成長する心を常に持つ）、Health（健康である）、Seize Opportunities（ここでしかないことをする）の5つの目標が掲げられている。くらぶち英語村はこれらの資質を備えた国際的に活躍できる人材の育成を目指している。

4. 地域社会との交流

高崎市の担当者はくらぶち英語村が開かれた場、地域にとって存在意義のある場になることを望んでいる。例えば英語村が行うクリスマスやバレンタインなどのイベントには地元の子どもたちも招待される。その一方、地元の伝統行事に英語村の子どもたちが招待されることもある。くらぶち英語村が開設されたことで復活した「どんどん焼き」と呼ばれる行事には英語村の子どもたちも参加する。「どんどん焼き」は毎年1月14日に行われる倉渕地区の伝統行事で、竹で櫓を組んで大きな火を起こし、正月の門松やしめ飾りなどを燃やす。またその火を使って、長い木の枝の先に付けた繭玉と呼ばれる餅を焼いたりもする。

イベントや伝統行事への参加だけでなく、互いに教えあう活動も行われている。2019年9月から、子どもたちが学校に行っている平日昼間、倉渕地区のシニア世代を対象に1時間ほどの英会話のレッスンが行われている。各回3、40名のシニア世代が参加するこのレッスンは、今年度合計8回開かれることになっている。一方で地元の人たちも英語村の子どもたちに様々なことを教えている。主なものとしては農業体験がある。英語村の子どもたちは、畑の作付け、田んぼの苗植えなどを地元の農家から教えてもらう。秋には地元の人たちも多数参加して収穫祭が行われ、子どもたちは自分たちが育てた作物を実家に送る。さらに1年を通して、地元の特産品の作り方も教わる。群馬の特産品のこんにゃくを始めとして、梅干し、秋の干し柿、冬の味噌作りなどを教えてもらう。さらに先述した伝統料理「おきりこみ」の作り方を指導してもらうこともある。

くらぶち英語村と倉渕地区の交流は、上述したような行事や活動にとどまらない。倉渕の人たちは通学時間になると、家の前で子どもたちに「おはよう」「がんばれ」などの言葉をかけてくれる。また地域のお年寄りも、子どもの姿

が見えて、子どもの声が聞こえるだけで気持ち
が明るくなるとのことである。倉渕地区の65歳
以上の人口の割合は46%で、高崎市全体の28%
を大きく上回っている。高齢化が進む倉渕地区
にとって、子どもたちが地域社会に居ること自
体が元気の源となっている。

人のつながりは時に倉渕地区や高崎市、群馬
県を超えて、遠く離れた土地に及ぶこともある。
縁あって、毎年夏に行われる広島の平和祈
念式典には英語村の子どもたちが千羽鶴を送っ
ている。またくらぶち英語村を巣立った後、英
語で授業を行う沖縄の高校に入学した生徒もい
る。くらぶち英語村ができたことで、倉渕地区
にこれまでになかった人的交流や地域間交流が
生まれている。将来的には、英語村出身の子ど
もたちの還流やIターンやUターンといった人
の流れが生まれることも期待されている。

5. くらぶち英語村の英語教育

くらぶち英語村では小中学校のカリキュラム
に沿った英語教育が行われているわけではな
い。また予備校や塾のように決まった教材が提
供されているわけでもない。ある意味自然な英
語習得が行われている。その一方、1週間の
生活の中で定期的に行われる英語学習活動もあ
る。主なものは以下の通りである。

- 1) 中学生を対象とした登校前の2、30分を
使った英語学習。週に4日ほど、英語の
歌や発音練習、またプリントを使った英
語学習が行われる。
- 2) Self-study と呼ばれる時間。外国人スタッ
フと1対1で15分ほど行われる。各自が
読む、聞く、話す、書くなどの目標を定
めて行われる。
- 3) 週に1回英語で日記を書く。外国人スタッ
フが日記を読んでコメントを書く。

定期的な言語活動ではないが、英語習得に
とって大きな効果を持つと思われるものもあ
る。一番重要なことは、寮生活や自然活動、文
化活動の中で、外国人スタッフ、日本人スタッ

フともに子どもたちと英語で話すということ
である。教室の中だけ、勉強時間の時だけとい
うことでなく、日々の暮らしと英語が密接につ
ながっている。

今回の訪問2日目に、子どもたちがみんな
でピザを作るという活動があった。外国人ス
タッフが談話コーナーで最初にピザの生地
の作り方やトッピングについて英語で説明した。
ホワイトボードにはピザ作りの手順が以下のよ
うな英語で書かれていた。

- ① Make the dough
 - A. Add 100ml water in pizza flour
 - B. Mix water & flour
 - C. Knead the dough
- ② Oil the pan
- ③ Press the dough in the pan
- ④ Poke the dough with the fork
- ⑤ Spread pizza sauce
- ⑥ A. Cheese
 - B. Other ingredients
- ⑦ Take pan outside to cook on a fire

上記の英語の指示の中には dough、knead、
poke、ingredients など、中学校で学ぶ語彙
の中には含まれていないものも多くある。

ピザづくりの説明が終わった後、別の外国人
スタッフがピザを焼くための焚火のおこし方
や注意点を英語で説明した。英語の説明が終
わった後、子どもたちは数人のグループに分
かれてキッチンでピザを作り、校庭に出て焚
火をおこし、焚火の上のフライパンでピザを
焼き始めた。外国人スタッフ、日本人スタッ
フがともに英語で話しかけながら子ども
たちの作業を見守り、子どもたちは問題な
くおいしそうなピザを完成させた。

今回のピザ作りに限らず、キャンプや川
遊び、山登りのなどの自然体験をする時
も同様に英語が使われる。またトラン
プなどで遊ぶ際にも英語が使われている。

子どもたちがスタッフに話しかける際
も英語を使うことが奨励されている。日
本語で話

しかけた子どもたちはスタッフからEnglish、please!と言われる。ただし子ども同士の会話ではどうしても日本語が使われてしまうようである。

定期的ではないが、英語の本の読み聞かせや英語のアニメを見る時間もある。今回の訪問2日目の午後には、子どもたちは談話コーナーでアニメ版クリスマスキャロルを英語で見ている。談話コーナーの一角には書棚があって英語の本が置かれている。子ども向けの本もあり、小学5年生の女の子は、1日数冊の多読をしていると話していた。

また年に数回英語でのプレゼンテーションも行われている。4月の入寮時には英語の自己紹介、夏休み明けの9月には休暇中の旅行のプレゼンテーションが行われる。11月の収穫祭の時には英語劇を発表する。また通年コースが終了する3月には、「1年を振り返って」というテーマで、保護者やスタッフの前で一人3分間のプレゼンテーションを行う。

くらぶち英語村の子どもたちの英語力は1年間でどれほど伸びるのか。子どもたちの英語力の伸びを示す数値データはないが、スタッフによると1年間で特にリスニング、スピーキングの能力が大きく伸びるとのことである。子どもたちも、くらぶち英語村に来た当初は外国人スタッフの言うことが分からなかったが、半年ほど経つとスタッフが英語で話していることが分かるようになり、スタッフと英語で会話ができるようになると話している。今回話を聞いた子どもたちの中には、リスニングとスピーキングだけでなく、リーディングやライティングの力も伸びたと話す子どももいた。スタッフは、子どもたちの英語力の変化を記録する目的もあって、1年間の各プレゼンテーションの様子をビデオで撮影している。

今回の訪問2日目、体験留学生在が帰った後のミーティングで、高崎市担当者の許可を得て通年コースの18名の子どもたちに日本語でくらぶち英語村の良いところを書いてもらった。

(4名の子どもは日本人スタッフとの面談、その他の事情でミーティングに参加していなかった。)

子どもたちが書いたくらぶち英語村の良い点は、以下の7つのカテゴリーに分類することができる。

- ① 英語が学べる ② 自然体験
- ③ 様々な活動 ④ スタッフや人間関係
- ⑤ 共同生活・生活習慣 ⑥ 文化体験
- ⑦ その他

ほとんどの子どもは、これら7つのカテゴリーの複数をくらぶち英語村の良い点として挙げていたが、英語が学べることを良い点として挙げている子どもが圧倒的に多く、18名中16名いた。各カテゴリーの回答数は以下の通りである。英語が学べることを肯定的に見る意見が一番多く、2番目が自然体験と様々な活動となっている。

- ① 16名 ② 9名 ③ 9名
- ④ 5名 ⑤ 4名 ⑥ 3名
- ⑦ 1名

英語が学べることを良い点として挙げた回答には「大自然に囲まれたこの倉敷で畑や田などのアクティビティーを英語ですべて行っているのととても良い環境だと思っています」や「自然や英語がどっちも学べること」など、自然体験と英語習得が同時に行えることを評価する意見があった。また「くらぶち英語村ではスタッフからの指示などはほとんど英語になります」「英語を毎日聞ける」「毎日英語を話すことで英語能力が上がる」といったように、日常的に英語を使う機会があることを良い点とする意見もあった。

自然体験については「大自然があって空気がきれいです」「自然とふれ合える」「自然が体験できる」といった回答があり、スタッフや人間関係については「人間関係を学ぶことができる」「友達もたくさんつくれる」といった回答があった。寄宿舎での共同生活については「自立できる」「しっかりと生活習慣ができる」と

いう意見があった。

体験留学 2 日目に行われた体験留学生から通年コースの子どもたちへの質疑応答では、英語は楽しいかという質問に対し、ほとんど全員がイエスと答えている。通年コースの子どもたちが学校教育とは違う形で英語が学べることを楽しんでいることが分かる。

訪問を終えて

英語を含んだ学びの活動は、「英語で学ぶ」「英語を学ぶ」の 2 つに分類することができる。くらぶち英語村の英語学習は前者の「英語で学ぶ」ということになるだろう。親元を離れてここに来た子どもたちは、豊かな自然環境と共同生活の中で、自然体験、文化体験、生活習慣などを「英語で」学んでいる。そのためここでの英語教育は英語以外の教科や特定のテーマを英語で学ぶ CLIL (Content and Language Integrated Learning) と似ているところもある。ただし CLIL が特定の科目やテーマに限定されているのに対し、くらぶち英語村の英語教育は生活全般に及んでいる。その点で外国人相撲力士の日本語習得に似ているかもしれない。

以前論文で「英語習得＝英語学習＋英語使用」という考え方を提唱したことがある（「英語習得の新たな枠組み－英語習得＝英語学習＋英語使用」『青山学院女子短期大学紀要』第 63 号、2009 年 12 月）。「英語学習」とは英語習得を第 1 の目的とする言語活動、「英語使用」とは英語習得以外のことを第 1 の目的とする言語活動のことである。例えば、同じ英字新聞の記事を読むという言語活動も、英語の授業の課題として読んでいる場合は「英語学習」になるが、ビジネスマンが仕事のために読んでいる場合は「英語使用」となる。ネイティブの講師と英語で会話することも、英語習得が第 1 の目的であれば「英語学習」となる。日本人の英語習得は「英語使用」でなく「英語学習」に大きく依存しているという傾向があるが、これは日本国内ではほとんどのことが日本語で事足り

るという言語状況、社会状況を考慮すればある程度仕方のないことかもしれない。しかしながらくらぶち英語村では、日本ではなかなか経験できない「英語使用」をほぼ毎日経験することができる。その点がくらぶち英語村における英語習得のユニークな点と言える。

もう一つのユニークな点は、日本人の「英語学習」がリーディングに大きく偏っている一方、くらぶち英語村ではリーディング以外のスキルが養われているという点である。日々の生活の中で、外国人スタッフだけでなく、日本人スタッフとも英語で会話をする機会があるため、リスニング、スピーキングの能力が 1 年の間に著しく伸びている。訪問して分かったが、外国人スタッフが話している英語は必ずしも簡単なものではない。それを理解できるリスニング能力は貴重な技能と言える。

一つ気になったことは、子どもたちがくらぶち英語村で「英語使用」を通して習得した英語能力をその後どのように維持していくのだろうかということである。ここを巣立った後はなかなか「英語使用」の機会を持つことができないかもしれない。そのため、せっかく習得した英語の技能が徐々に退化してしまう可能性もある。もし将来、同窓会などの機会があるならば、言語維持の問題も含め、子どもたちのその後の様子を見てみたいと思った。

その一方、自然との深いかかわりや共同生活の経験、それらの経験を通して養われた自立独立の精神や、協調性、積極性などの資質はその後長く子どもたちの中に残るものと思われる。さらに、くらぶち英語村で築かれたスタッフ、友人、地元の人たちとの人間関係もその後の貴重な財産となるだろう。これら英語以外の成果も、くらぶち英語村の重要な役割と言えるのではないだろうか。くらぶち英語村が地域社会に受け入れられる存在として今後も長く存続してゆくことを祈念したい。